

# 知的障害特別支援学校におけるキャリア教育に関する意識調査

—千葉県内の知的障害特別支援学校全学部主事への質問紙調査を通して—

## Questionnaire Survey on Career Education at Special Support Schools for Children with intellectual disabilities

磯野 浩二<sup>1</sup> 佐藤 慎二<sup>2</sup>

千葉県内全ての知的障害特別支援学校の小学部・中学部・高等部主事を対象とした質問紙調査を実施した。その結果、①キャリア教育に関する詳細情報はまだ周知段階にある、②高等部はキャリア教育を意識した実践をしているとの回答が多かったが、小学部・中学部は実践への反映に不安を抱いている、③その背景として、教育課程の系統性に弱さがある、⑤教育課程の系統性を高める上での授業研究会等の活用可能性等を指摘した。

キーワード：知的障害特別支援学校、キャリア教育、学部連携、系統性

### I. 問題と目的

近年、キャリア教育の重要性が叫ばれ、特別支援学校学習指導要領にも明記された。国立特別支援教育総合研究所（「課題別研究報告書」平成22年）は、キャリア教育の充実に向けて、特別支援学校における小・中・高等部の独自性（重点）と学部間の系統性を明確にした教育課程の改善、個別の指導計画・個別の教育支援計画の充実を挙げている。また、『知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」』（平成22年）を示し、キャリア教育の視点からの教育課程見直しと小学部から高等部までの連携が提唱されている。しかし、キャリア教育が日常の教育活動でどの程度意識され、どのような取り組みが行われているかは明らかにされていない。

そこで本研究では、千葉県内知的障害特別支援学校の全学部主事を対象とした質問紙調査を通して、キャリア教育への取り組みの現状と課題を検討することとした。

### II. 方法

1. アンケートの対象—千葉県内の知的障害特別支援学校小学部主事23名、中学部主事23名、高等部主事25名（分校、分教室含む）
2. アンケートの内容—各学部のキャリア教育に対する意識やその実施状況等
3. 調査実施期間—平成23年7月下旬から8月中旬（回収率100%）

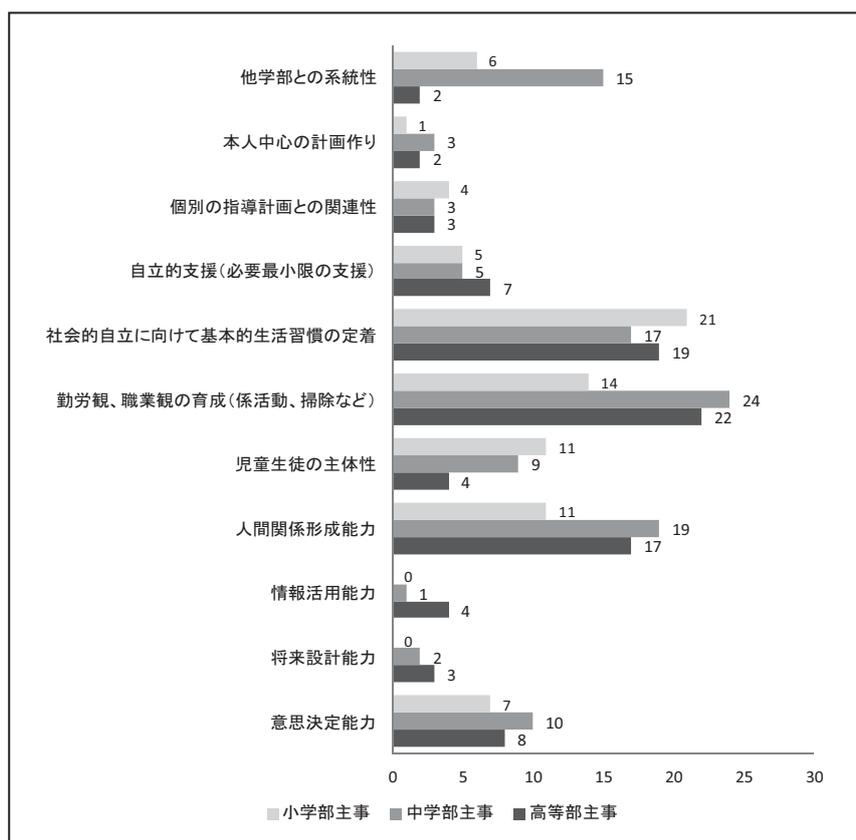
### III. 結果と考察

#### 1. キャリア教育の必要性とその指導内容について

	小	中	高
必要である	20	22	24
必要だと思わない	1	0	0
どちらとも言えない	2	0	1
進路指導、職業教育との違いが分からない	0	1	0

1 千葉県立市原特別支援学校

2 植草学園短期大学



キャリア教育の必要性は高く意識されている。また、重視したい指導内容として、「社会的自立に向けた基本的生活習慣の定着」「勤労観、職業観の育成」を各学部とも重視している。「本人中心の計画作り」「個別の指導計画との関連性」はキャリア教育の重点事項として指摘されているが、キャリア教育との関連性は意識されていないようだ。小学部・高等部の狭間に位置する中学部は「他学部との系統性」を重視していることが明らかになった。また、キャリア発達段階の4領域として挙げられる「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」は重視されていない。用語そのものがまだ周知されていない点と仮に理解されていても知的障害教育における具体的な活動がイメージしにくい点が指摘されよう。しかし、「人間関係形成能力」を重視するとの回答が多いのは、自立活動との関連もあり意識しやすく取り組みやすいためと思われる。

## 2. 各学部段階で重視したい教育課程と授業への反映

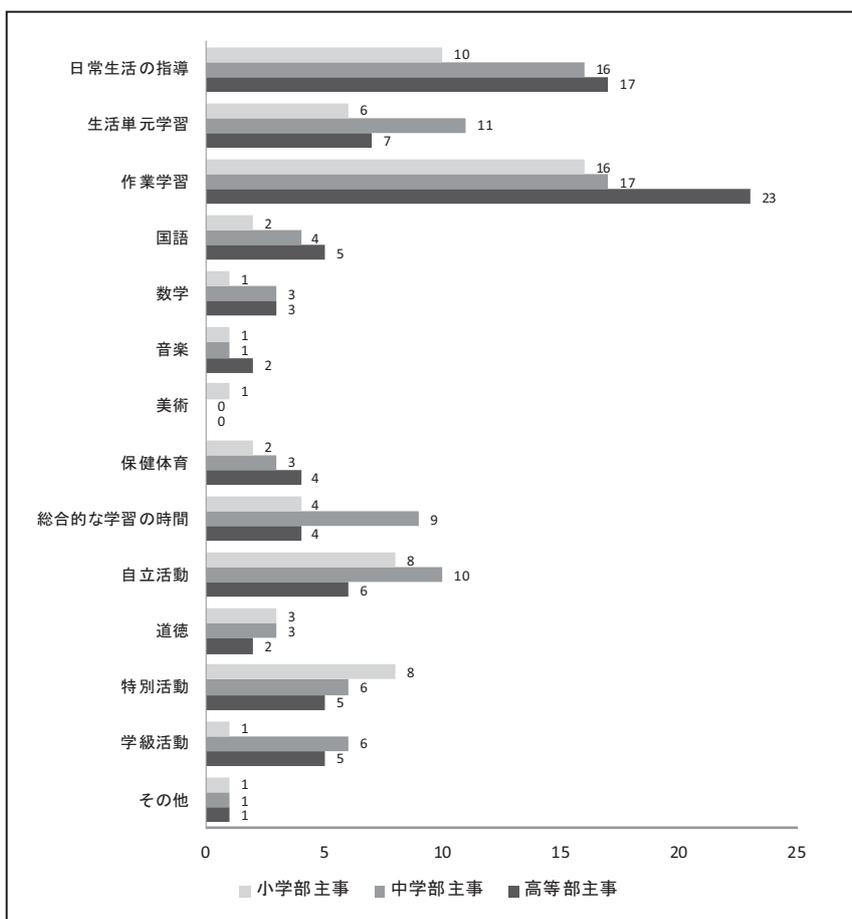
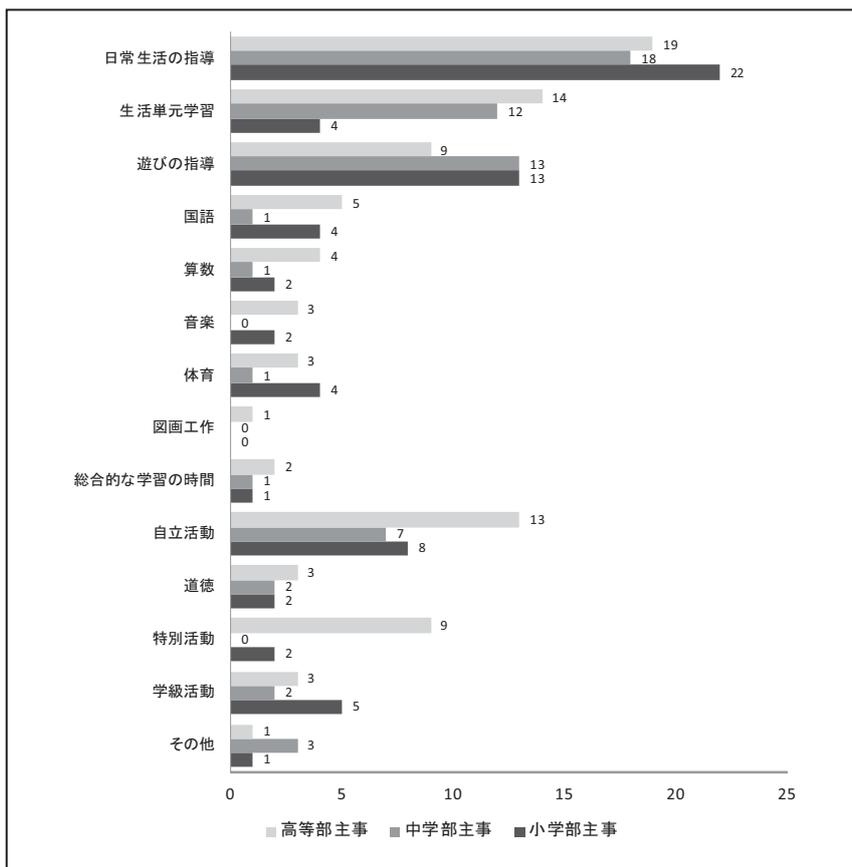
次に、どの教育課程を重視したいのか、他学部に対して、どのような教育課程を重視してほしいかの

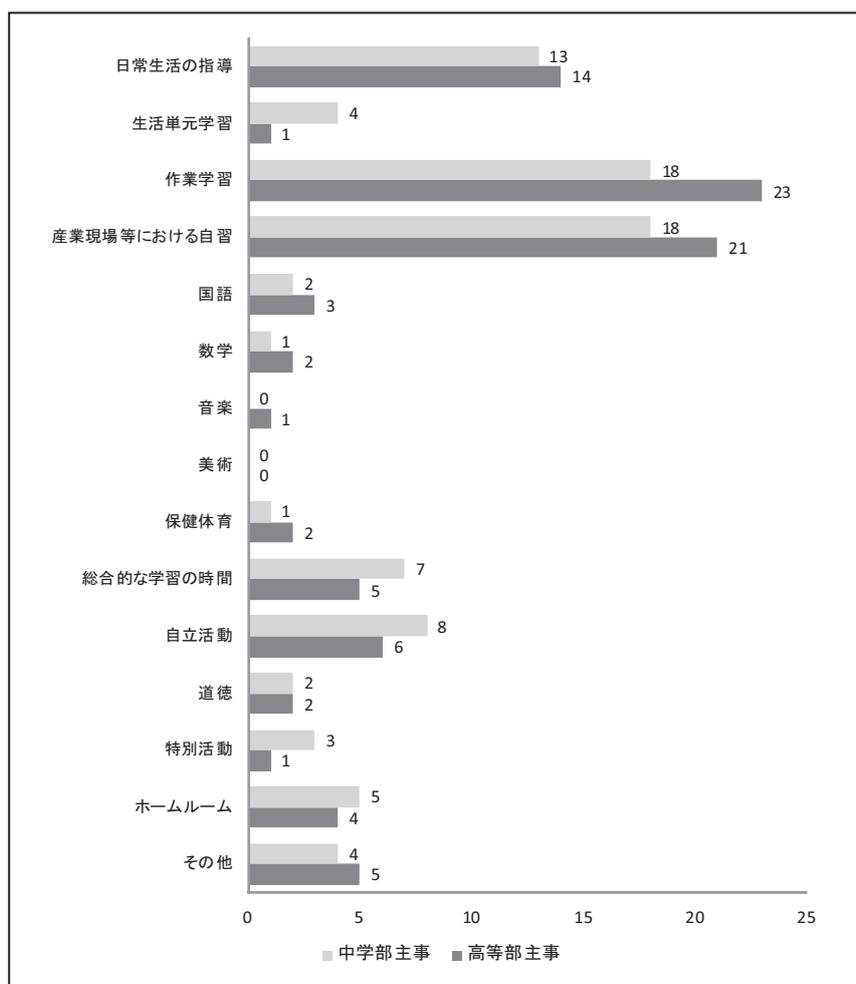
回答を求めた。

(1) 小学部に関して－各学部とも日常生活の指導、生活単元学習、遊びの指導を重視している。自由記述を踏まえ、その背景を考察すると、小学部ではまず基本的生活習慣を定着させ、遊びの指導、生活単元学習等の「合わせた指導」を通して、一般的な自立力を高めてほしいとの期待が伺える。また、自立活動も高い数値を示す点は、自立活動の中の「人間関係の形成」や自立に向けた諸能力の育成への期待と思われる。

(2) 中学部に関して－各学部とも作業学習、日常生活の指導、生活単元学習を重視している。自由記述を踏まえ、その背景を考察すると、中学部では「社会で働くこと」を念頭に置いた働く力、勤労観、職業観の育成と基本的生活習慣の確立、合わせて、人間関係形成能力・コミュニケーション能力を高めてほしいとの期待が伺える。

(3) 高等部に関して－本調査項目は小学部主事を対象としていない。それは、直接的な連携の機会がないためである。しかし、小学部の卒業生の多くが中学部を経て高等部に進学する現状では、“小学部から高等部への期待”も調査対象とすべきであっ





た。その意味で、本質問紙調査の手続きの不備があった。そのため、中学部と高等部のみが対象であるが、高等部では、作業学習、産業現場等における実習が重視されている。卒業後の生活を見据えて、働く力を中心とした社会的自立の力を身につけてほしいとの期待に集約されよう。

(4) 各学部全体を通して下表は、キャリア教育の視点が教育課程に反映されているかどうかを尋ねた結果である。「反映されている」との回答は高等部が高く、中学部、小学部と「どちらとも言えない」との回答が増える。これは、(3)で触れたように、社会との接点に位置する高等部は社会的自立に向けた教育を実践し、すでにキャリア教育の求めに応じているとの意識の表れであろう。一方、6割を

越える小学部主事が「どちらとも言えない」と回答している。それは、-キャリア教育を意識しているか否かだけではなく、-最終的に求められる社会的自立に直結した教育課程になっているかどうかという点では不安を抱いている点が示唆されたと言えよう。下表はキャリア教育が個別の指導計画、教育支援計画に反映されているかどうかを問うた設問であるが、子ども一人ひとりの観点に立った場合にも、特に、小学部は「どちらとも言えない」が多く、上記の不安が反映されている。一方、高等部でも、「どちらとも言えない」が半数を占め、子ども一人ひとりに立ち返った段階では、キャリアに関する支援が十分か否かの不安を抱いている点が明らかにされた。

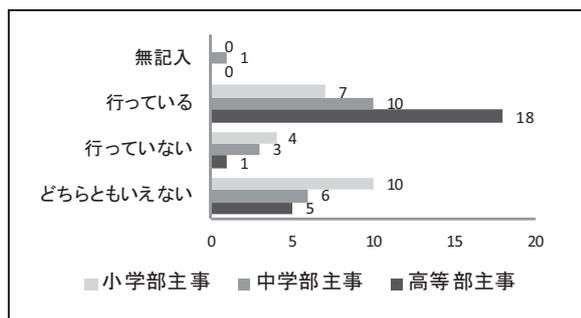
	小学部	中学部	高等部
反映されている	7	14	20
反映されていない	1	1	0
どちらとも言えない	15	8	5

	小学部	中学部	高等部
反映されている	5	11	13
反映されていない	1	4	0
どちらとも言えない	15	8	12

(5) キャリア教育の授業への反映 - (4) までに示された傾向と同様であるが、むしろ、小学部・中学部は「行っていない」との回答が増えている。キャリア教育の必要性を認識しつつも、現状でいいのかどうかの疑問を抱いている点が明らかにされた。

「行っている」との回答が多かった高等部主事は作業学習、産業現場等における実習、職業・家庭への反映を指摘した。

### 3. 学部間の教育課程の系統性や連携について



冒頭で触れたように、国立特別支援教育総合研究所はキャリア教育の意義として、教育課程の見直しをしつつ、学部間の系統性や連携を図る重要性を指摘している。

すでに2において指摘したように、小学部・中学部はキャリア教育の必要性を認識しつつも、実際の教育課程の妥当性・有効性に関しては、必ずしも、満足せず不安を抱いている。それは、教育課程の系統性・一貫性や学部間連携の不十分さの表れとも考えられる。

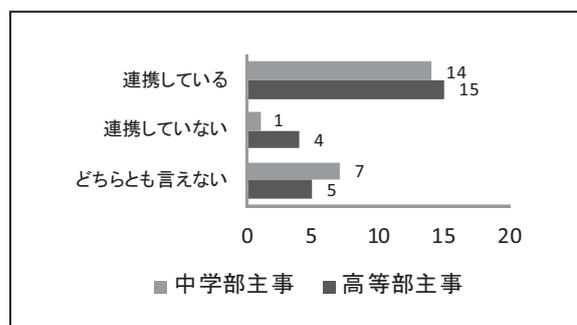
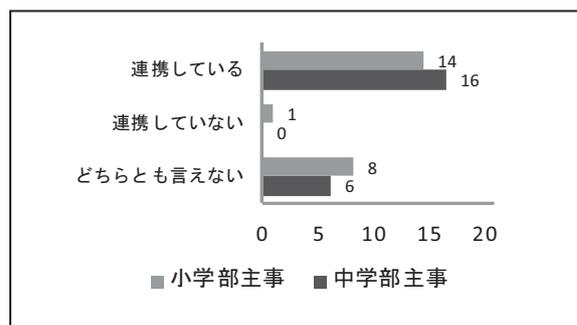
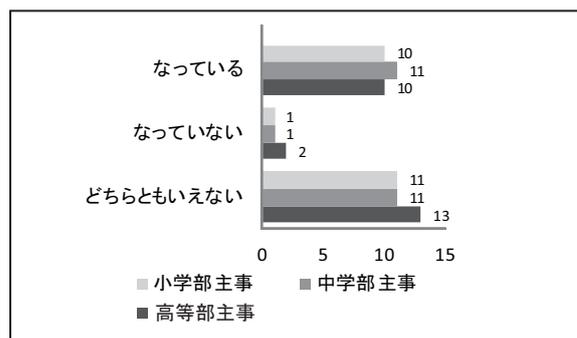
そこで、学部間の教育課程の系統性や連携の現状についての設問を用意し、その回答に基づき以下のように検討した。

小・中の系統性については必要であると答えた主事は小22名、中22名。中・高の系統性については中22名、高19名であった。

学部間の系統性が必要であるとの認識を示しつつも、現状の教育課程が系統立てたものになっているとの回答は半数以下であった。

また、連携に関する設問に対しては、小学部と中学部は連携していると回答した主事は、小14名、中16名。中・高では中14名、高15名であった。

すなわち、連携している現状はあるが、それが不十分であり、教育課程の系統性にまで成熟した中身

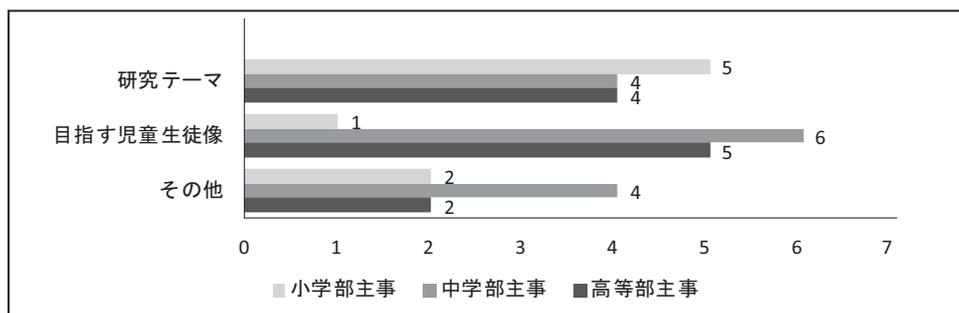


にはなっていないとの認識が示されている。

また、どのような方法で連携しているかの回答を求めたところ、小学部と中学部、中学部と高等部のいずれもが授業研究会・全体研究会等の研究会を指摘した。

キャリア教育を意識して教育課程の系統性を図る上で、授業研究会等での議論の活性化が一つの大きな方法になりうることが示唆された。また、次図は「どのような内容で連携しているか？」という設問に対する回答である。

学校教育目標等の目指す子ども像で連携している、研究テーマで連携しているを合わせると約半数になる。系統性を図るために、連携を密にすることは、キャリア教育に限らず必要なことである。限られた機会ではあるが、職員会議や全体研修の場を有効に活用し、職員間の共通理解を図り、キャリア教育に関する学校全体の方向性を確認していく必要があるだろう。



#### IV. 総合考察

上記の検討を踏まえ、知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の意義・目的及び今後の展開について検討した。

##### 1. 通常の教育分野への対応

キャリア教育の端緒となった「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（平成16年1月公表）では、『〇精神的・社会的自立が遅れ、人間関係をうまく築くことができない、自分で意思決定ができない、自己肯定感を持ってない、将来に希望を持つことができない、進路を選ぼうとしないなど、子どもたちの生活・意識の変容、〇高学歴社会におけるモラトリアム傾向が強くなり、進学も就職もしなかったり、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学したりする若者の増加』等が指摘された。すなわち、当時は、明らかに、通常の教育分野の課題への対応としてキャリア教育が提唱された背景がある。

##### 2. 知的障害教育とキャリア教育

「キャリア教育ガイドブック」（国立特別支援教育総合研究所、2011、ジアース教育新社）では、「社会的自立・職業的自立に向けて、児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」とされている。これは、学校教育法第72条にある特別支援学校の目的とむしろ合致する。特別支援学校学習指導要領解説における知的障害のある児童生徒の支援の基本としても、かねてより「望ましい社会参加を目指し、日常生活や社会生活に必要な技能や習慣が身に付くよう指導する。」「職業教育を重視し、将来の職業生活に必要な基礎的な知識や技能及び態度が育つよう指導する。」重要性が指摘されており、その内容はキャ

リア教育そのものと言える。

そのため、本調査の自由記述でも見られた「これまで（の進路指導や職業教育）との違い」は本質的にはないと言えよう。

##### 3. 知的障害特別支援学校とキャリア教育

それでは、知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の意義・目的は何であろうか？

今回の調査結果では、各学部の教育課程の要である学部主事の多くが現状の教育課程の系統性に関する弱さを指摘していた。先の文献では、「キャリア教育の視点からの教育課程の改善」「教員間・学部間の共通理解・組織的な取組を促す」「教育課程の一貫性・系統性を高める」等の意義が指摘される。

すなわち、進路指導や職業教育という高等部段階で強くイメージされる視点ではなく、キャリア教育というより包括性の高い視点から、学校全体の教育課程を見直す意義である。小学部段階から一貫性と系統性ある教育を積み上げることにより、「自立と社会参加」を確かにする意図があると思われる。各学部を鳥瞰する役割を果たす「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」の提案はその象徴と言えよう。

##### 4. キャリア教育の展開のために

本研究では、キャリア教育の実践的な展開方法の一つとして、授業研究会の活用を指摘した。筆者の一人である磯野は、用語の難解さや実践イメージの持ちにくさがある「キャリア発達段階・内容表」の検討、それに基づく学習指導案の作成と授業研究を実践した。その研究成果は、「平成23年度千葉県長期研修生 研究報告書－特別支援教育－」（千葉県総合教育センター）及びその補足資料に掲載予定である。